

龍王山、龍王池 (最上稲荷、龍泉寺)

～「報恩大師」ゆかりの吉備を代表する「霊場」～

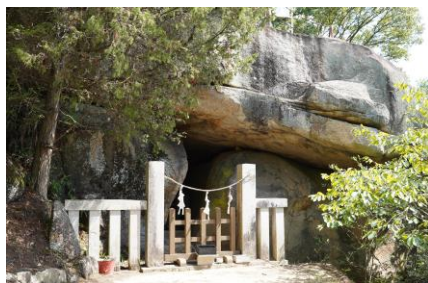
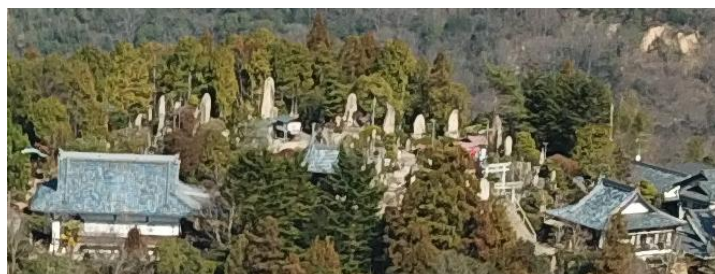
目次

1. おすすめポイント
2. 説明
3. 最上稲荷奥之院
4. 霊光殿背後の石彫
5. 八畳岩
6. 龍王池
7. 龍泉寺
8. 「鳥の目」で
9. アクセス

資料
番号

K16

初版：2026.2.11



1. おすすめポイント

★山全体（池も含め）が霊場、聖域

ここに紹介する場所を是非巡ってみてください。
岡山有数の初詣参拝客数を誇る最上稲荷の深み、
人々の篤い信仰心の「熱」を感じ取れます

★最上稲荷本殿（霊光殿）背後の**石彫**、**八畳岩**そして
（ちょっと恐れ多いですが）そこからの**眺望**は毎年
詣でられている方にもお勧めです

2. 説明

下枠内 参考文献1「八木敏乗, 岡山の祭祀遺跡 (岡山文庫 145) . 日本文教出版, 1990, p 105-106」より引用させていただきます。

竜王山

岡山市高松

古代吉備の強大と独自の文化を生み育ててきた足守川を眼下一望に収める竜王山(二八六メートル)は過ぎた栄光の歴史を秘めて昔の姿そのままに、今も信仰の対象の山である。かつてこの山頂を奥宮とした麓の社は、今は高松稲荷として空前の信仰の場となり殷賑を極めている。

はるかに遠い時代から山麓周辺の深い「神する心」に支えられてきた神座(磐座)は、この竜王山の頂の巨石群の中に一際、重々しく立っている。

竜王山から西南方向に標高差にして五〇メートル低い山並に主峯の大崎山があり、この山の北方、下足守の御滝地区から、三井谷、南坂、上土田の新田、そして門前の見世、浦田、小山、大崎、次いで東面する平山の慕田、稲荷の各集落が囲む径二歳半ばかりの地域と、その南方、立田、坂古田、周辺地域は国内でも類の少ない超過密群集墳地域(総数三〇〇余基)で、一平方歳当たり大小約六〇余基の主として前・後期(古墳時代)の各種多様な古墳がひしめいている地域である。

これはこの地域が早くから他に魁け、人の定着と拓殖が進み、山麓に集落を形成して、文化の蓄積を重ねてきた事を物語り、天の神を竜王山頂の神座に奉斎し、父祖の霊を、神の山に連なる大崎山を頂峰とする各峰の尾根上に配したもので、この観念は渡来して来た大陸人が、曾祖の地から持ち越してきた、古代中国の精神文化の粹「封禪」から発したとされる斎天山岳信仰を軌範として形成祭祀したものと思推される。

八木氏説明にある高松稲荷は現在、どちらかというと**最上稲荷**の名の方が全国的には通っているかもしれません。正式名称は最上稲荷山妙教寺、明治の廃仏毀釈を免れ神仏習合が残った貴重な例です。寺でありながら鳥居も多数あります。

創建は8世紀、**報恩大師**(※)が天皇の病氣平癒祈願で功を成したことによるとされており、この時大師が最上位経王大菩薩(ご本尊)を感得した場所とされる**八畳岩**を含め**龍王山**には古代磐座と思われる巨石が多数あります。

龍泉寺のご神体である**龍王池**のそばにも古代祭祀の跡があり、まさに全山が古くから聖域であったようです。

是非、最上稲荷から八畳岩(題目岩も)、奥之院、龍王池(龍泉寺)を巡って吉備有数の霊場の「気」を感じてみてください。

※天皇病氣平癒の功により報恩の名を賜ったとされています

3. 最上稲荷奥之院

2020.1.11



3-1

▶ 地理院地図に赤で追記



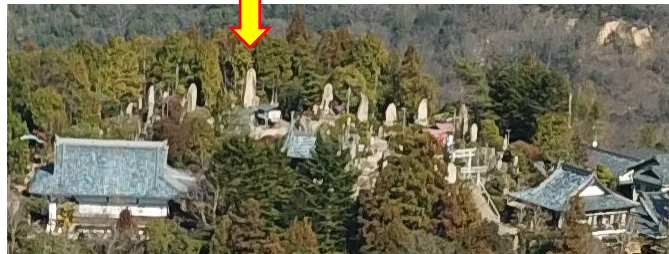
3-3



3-2



3-4



3-5 奥之院全景 (図8-1の一部デジタルズーム)

参考文献1の中で八木氏が磐座としているのはこの石のようです (3-1, -2は裏と表、3-4, -5は矢印で示すのがこの石)。山頂部全体が巨大な岩の露頭 (もはや当初の姿は想像できませんが) のようで、この石はその頂部に立てられているように見えます。立ち並ぶ石塔、石板に人々の信仰の熱が感じられます。

4. 最上稲荷靈光殿背後の石彫

2020.9.21



4-1



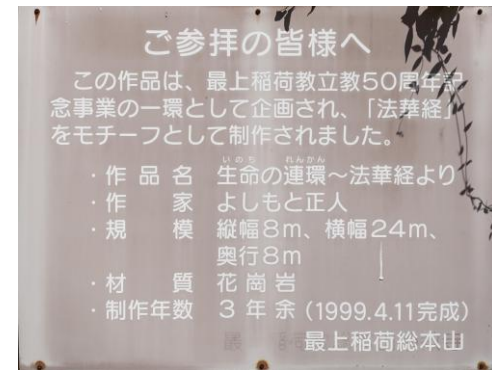
4-2



4-3



4-4 最上稲荷現地案内板写真に
赤で追記



4-5

現地案内板

最上稲荷本殿（靈光殿）背後の巨大な岩盤の露頭には石彫が施されています。
現代版巨大磐座のように感じます



5-1

最上稲荷の**根本霊場**である八畳岩。天井面は展望台になっており（ちょっと恐れ多いですが・・・）、下図のように古代吉備主要の地を一望できます。福山の八畳岩と同様、古代吉備の歴史中心地を永く見守ってきた磐座です。

（場所、アクセスは図9-2，3参照）

最上尊降臨の霊地・八畳岩

天平勝宝四年（七五二）、開山・報恩大師が、孝謙天皇の病氣平癒のため八畳岩の岩窟に籠もり、観世音菩薩普門品の呪を唱えて祈願されたところ、二十一日目の早暁に最上位経王大菩薩（最上尊）を感得。そのお姿を自ら刻み祈願を続けると、天皇は快癒されたと伝えられています。

八畳岩は、最上尊が最初にお姿を現わされた聖域・最上稲荷総本山の根本霊場として、篤い信仰を集めています。

また、龍王山も吉備史跡県立自然公園および保安林に指定されています。当地においては、尊崇の念を持ち清浄護持を心がけて下さい。

5-2

現地説明板



5-3

八畳岩天井面



5-4

この2つの岩の間を抜けると左図の天井面に出ます



5-5

龍王池

龍泉寺では、龍王池を八大龍王の御神体としてお祭りしています。
龍王池の名前の由来は古く、吉備津彦命の時代（紀元前 200 年頃）までさかのぼります。鬼城縁起に、龍王池と龍王山の由来が記述されています。

吉備津彦命の軍奉行であった楽々森舎人は、超能力を持っていて、芦守山の山頂の岩を穿って、水を湧き出させ、地域の人々を潤しました。湧き出た水は、山の中腹の池となりました。その後、倭鉢羅龍神が芦守山に飛来し、地域の人々を護ったので、いつしか芦守山を龍王山、池は龍王池と呼ぶようになりました。

江戸時代に、足守の太田屋であった難波助兵衛が、農業用溜池として龍王池を改築し、正徳三年（1713 年）竣工しました。

明治になって、龍泉寺の日護聖人が、龍王池の堤防をかさ上げし、現在にいたっています。

八大龍王

八大龍王は、生命の源泉である「水を司る神様」です。
お釈迦様がお生まれになった時、天より甘露を降らせ祝福したともいわれる高い神格をもつ龍神です。

八大龍王は、人々の願いにあわせて、奇瑞を現し、八つの異なる姿に変化し、人々をお救いになります。

鬼城縁起 - 923 年に書き写された鬼城縁起が吉備津彦神社に伝わる
と舎人 = 古代、天皇・皇族の身边で御用を勤めた者
楽々森 = 足守の豪族で吉備津彦命の舎人 桃太郎伝説の猿のモデルと言われる
倭鉢羅龍神 = 八大龍王の変化の一つで、青いハスの花が咲く池に住む龍神
甘露 = インド神話では、神々が常用する飲み物で、飲むと不老不死になると言われる
奇瑞 = めでたいことの前兆として起こる不思議な現象

最上本山 御滝 龍泉寺のホームページ
<http://ryusenji.jpn.org/>

最上本山 御滝 龍泉寺

6-1

現地説明板



6-2



6-3

説明にあるように、龍王池は龍泉寺祭神の御一柱である八大龍王の「御神体」です。近くには古代祭祀跡もあります（次頁 境内案内図参照）。

（場所、アクセスは図 9 - 2 参照）

7. 龍泉寺

(場所、アクセスは図9-2参照)

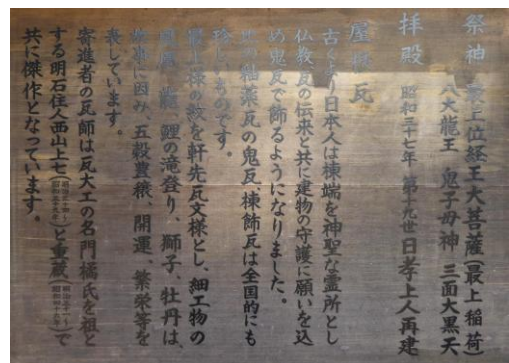
2020.1.11



7-3

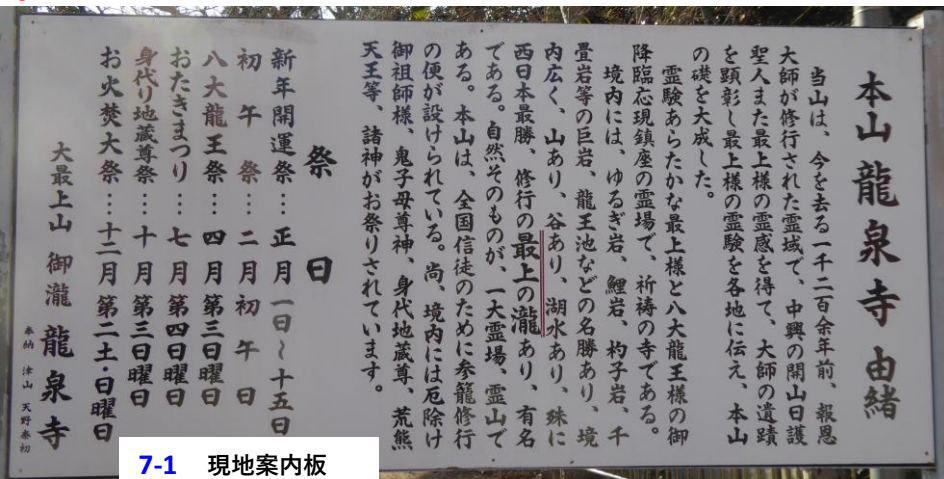


7-4

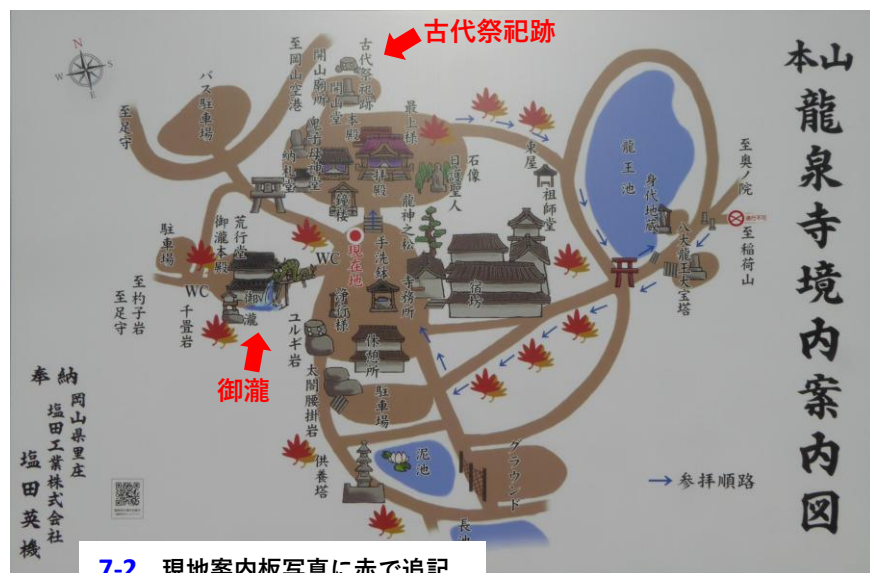


7-5

現地案内板



7-1 現地案内板



7-2 現地案内板写真に赤で追記



7-6



7-7

御瀧（滝修行の場）も聖地に相応しく岩盤の露頭です（図7-7）。
びっしりと並べられた石塔や祠に篤い信仰の歴史を感じます。

8. 「鳥の目」で

2020.1.11

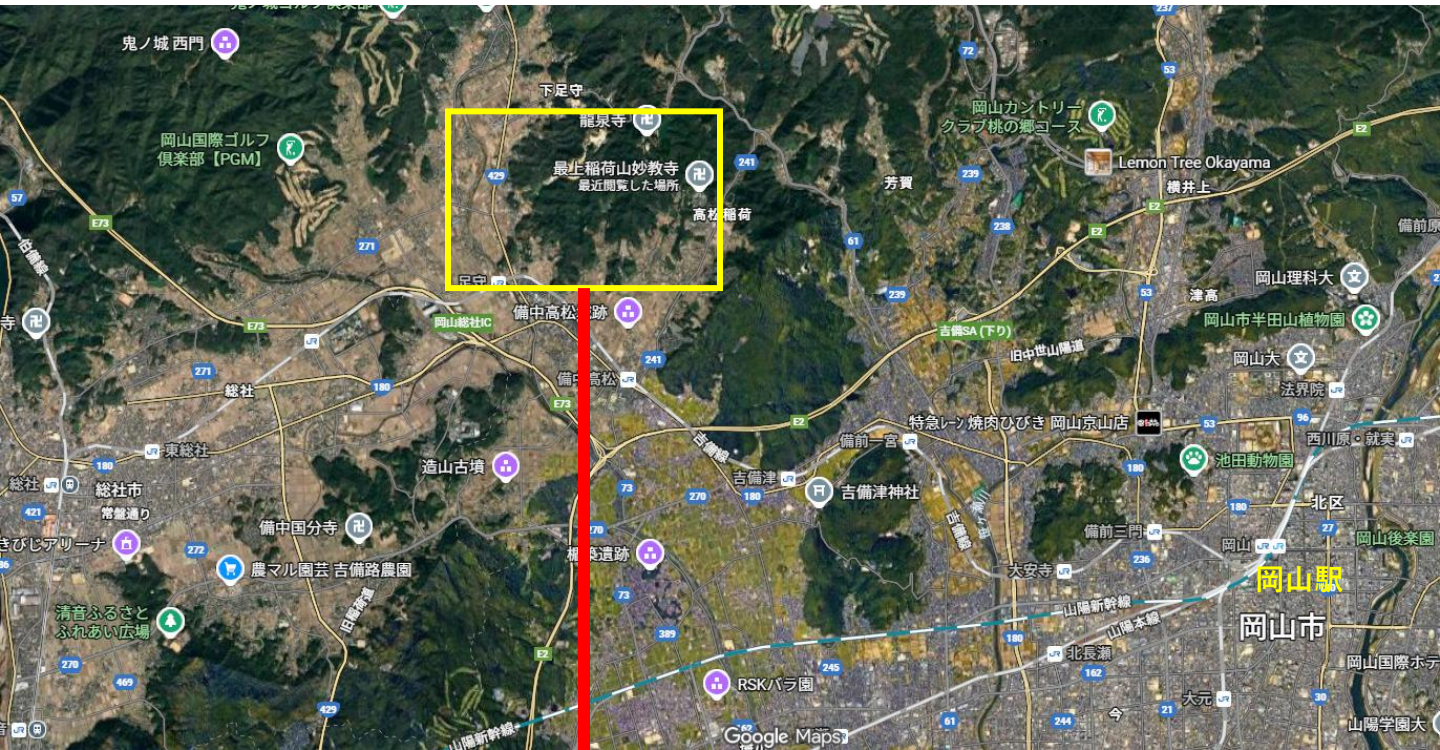


8-1 最上稲荷奥之院 (3 頁参照)

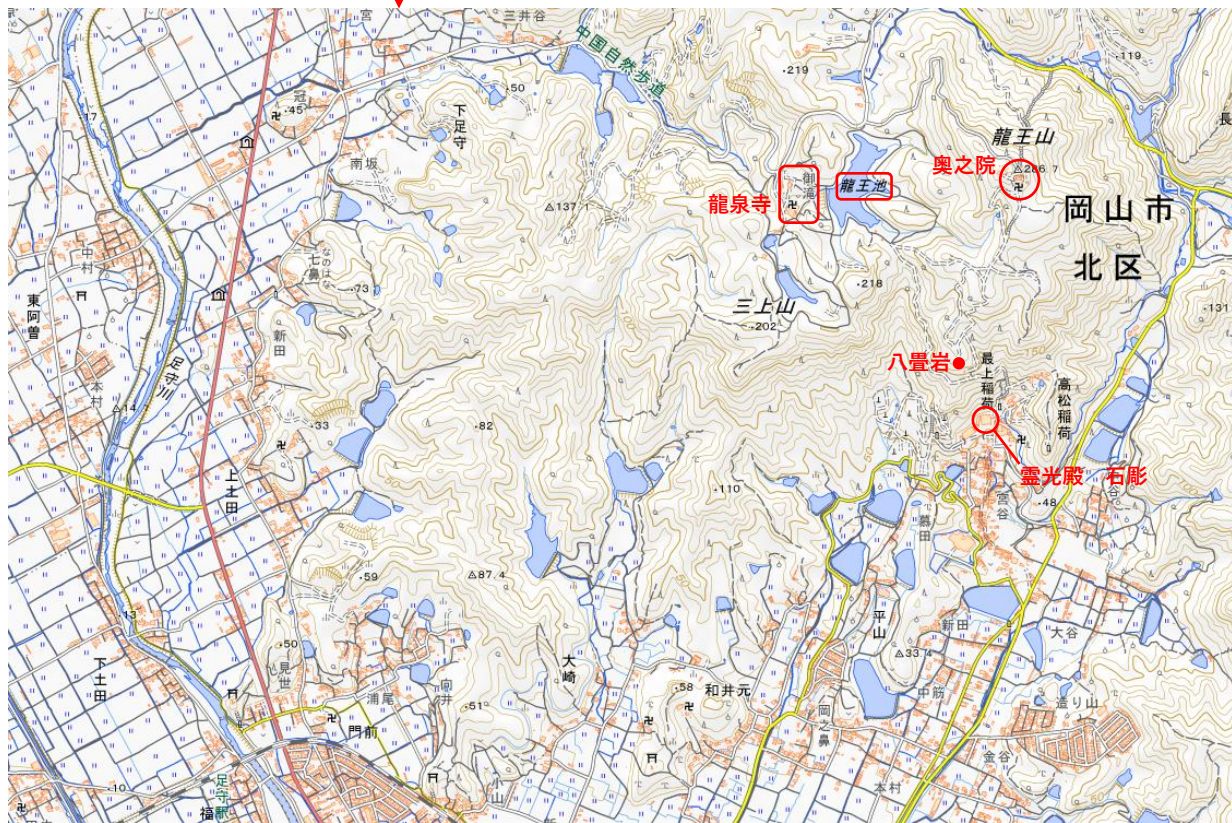


8-2 龍王池 (6 頁、7 頁参照)

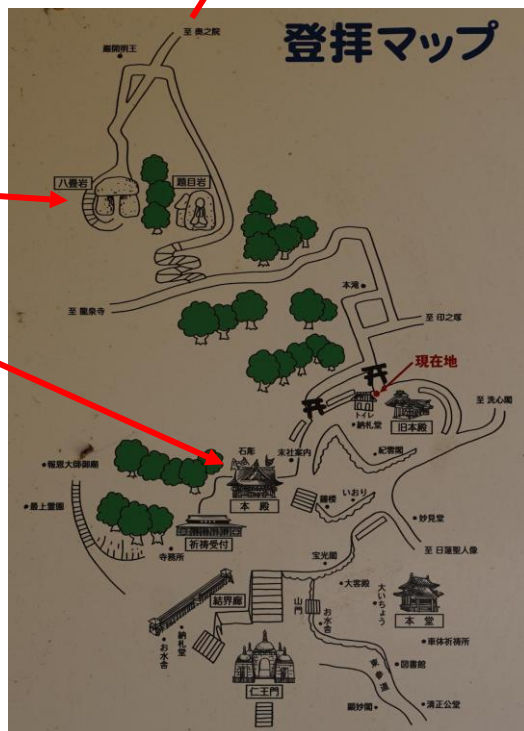
9. アクセス



Google Mapに赤黄で追記



地理院地図に赤で追記



八畳岩

本殿（霊光殿）と石彫

9-3

現地説明板

説明板写真に赤で追記

参考文献

- 1) 八木 便乗. 岡山の祭祀遺跡 (岡山文庫145). 日本文教出版, 1990, 173p.

おまけ

かつては奥之院までケーブルカーが！

～最上稲荷ゆかりの二つの鉄道～ 吉備線稲荷山支線とケーブルカー

1. 吉備線稲荷山支線「稲荷軽便鉄道」

平成26年(2014)に開業110周年を迎えた吉備線は、中国鉄道株式会社(現:中鉄バス株式会社)により、明治37年(1904)11月15日岡山～総社湯井間で開通しました。開業時、岡山駅からの乗降客は連日300人を超える盛況ぶり。開業間もない12月2日は旧暦25日で当時の当山のご縁日にあたり、岡山からの乗客448人のうち345人が稲荷駅(現:備中高松駅)を利用し

たそうです。稲荷駅から当山までは約2.5kmの歩きでした。そこで、さらに参拝者の利便性を図るため計画されたのが、稲荷軽便鉄道でした。

「稲荷軽便鉄道」(後に吉備線の稲荷山支線となる)が営業を開始したのは、明治44年(1911)5月1日のことです。稲荷駅と参道口にあった稲荷山駅間の乗車時間は8分。時間も労力も大幅に短縮され、参拝者に大変喜ばれました。開業当日は、県下でも珍しい軽便鉄道を一目見ようと物見高い人々

が多数押し寄せ、参道の旅館や料理店は大いに賑わいました。また、5月14日には、開通式が当山妙教寺にて盛大に行われました。中国鉄道全線の各駅から稲荷山駅への往復乗車運賃は半額となり、当山では14・15の両日臨時大祭を開催し、参拝者には御神酒などを振る舞いました。また、沿線各駅でも国旗などを飾りつけ、餅投げなどを行って開通を祝ったそうです。

昭和4年(1929)には吉備線の支線(稲荷山

支線)として線路の付け替え工事が行われ、12月30日からは岡山駅～稲荷山駅間で直通運行が始まりました。当山の大きな行事の際には急行列車も運行されました。列車が到着するたびに参拝者であふれ、受付が混雑して対応に苦慮したそうです。しかし、太平洋戦争の局面が悪化してくると、全国の不要不急路線(観光輸送などが主力の路線であり、軍事上重要度の低い路線)の中で廃止路線に選定され、昭和19年(1944)1月11日、軍需用の鉄材

供出のため運行を休止し、同年6月2日に廃止となりました。

吉備線稲荷山支線の終点・稲荷山駅は、現在、中鉄バス乗り場になっています。

2. 中国稲荷山鋼索鉄道(ケーブルカー)

昭和4年(1929)2月9日、当山境内の山下駅(現:旧本殿付近)と山頂の奥ノ院駅とを結ぶ中国地方唯一のケーブルカーが開通しました。総延長

は約390m、所要時間は4分、20分間隔で運行していました。開業以来大勢の参拝者に利用され親しまれましたが、稲荷山支線と同様、鉄材供出のため廃止となり、レールは軍需用に転用されました。

戦後にケーブルカー復活計画が浮上し、昭和36年(1961)に稲荷山観光ケーブル株式会社が発立され、同年7月鉄道敷設免許を取得しましたが、昭和41年(1966)11月10日に失効し実現はしませんでした。

「山頂に茶店が2軒(1軒はみやじという名前)あって、うどんがおいしかった」などと、当時を知る方から話を聞きましたが、このケーブルカーに乗るのも参拝の楽しみの一つだったようです。

山下駅の跡形は全くありませんが、八畳岩や奥の院へ向かう参道を登る途中、本瀬付近の直線の階段(延寿乃石段)がケーブル跡になります。その脇には、当時の排水溝や路盤のコンクリートが残っており、さらによく探せばレールのボルトも見ることが

できます。中腹から山頂にかけての路線跡は深い谷となっており、立ち入りはできません。また、奥ノ院駅の跡についても、乗降場や車両の巻上機の台座などの一部が残っていますが、雑木が繁茂しており、さらに崩落の危険もあるため、立ち入りはできなくなっています。

多くの人が訪れた名残は、昭和14年(1939)に建てられたラジオ塔(高級品であったラジオ普及のための公衆用聴取施設。全国で450基程度)

されましたが、現存するのは20数基)からもうかがえます。

※参考文献※

「中興九十年の歩み」(中鉄バス株式会社)
「吉備線稲荷山支線と最上稲荷」(久保家)

右の画像は、当山で保管する「昭和16年(1941)に行われた最上稲荷山妙教寺23世日宣聖人(善山)の写真とケーブルカーの絵葉書です

※吉備線稲荷山支線・稲荷山駅をのぞむ※

御旅の前に整列する行列の後方左手に見えるのが稲荷山駅。画像中央に見えるのが「奥の院行きケーブルカー」と書かれた看板。その隣はケーブル出張所。



※中国稲荷山鋼索鉄道の車両※

使用された車両は、四輪車で重量6000kg、定員50名、サイドドア、単車履帯、自動及び手用制動機付きのもの。



※中国稲荷山鋼索鉄道の巻き揚げ機※

この鋼索鉄道は、単線電力鋼索鉄道であった。巻き揚げ機は、電動機で60馬力(約47700ワット)。

